

プラハ言語学サークルの第10テーゼ

飯 島 周

(The Tenth Thesis Presented By The Prague Linguistic Circle)

Itaru Iijima

Summary

This paper, consisting of two parts, is to examine some aspects of the basic linguistic theory developed by the Prague Linguistic Circle, by translating the last of the ten theses which the circle presented to the First Congress of Slavists held in Prague in 1929.

The thesis is connected with language teaching in secondary schools, and includes many important ideas from the viewpoint of functional linguistics. The points suggested in the thesis are the conception of language as a functional system, the effort to establish exact characterologies of various contemporary languages, the exploitation of synchronistic (or contrastive) linguistics in language teaching, the distinction between teaching (or better, cultivating) of the mother tongue and foreign language teaching, the importance of stylistic consideration, and some more methodologically new proposals.

In conclusion, the tenth thesis, together with other theses, still holds good, though it appeared over half a century ago.

〈はじめに〉

本稿の目的は、プラハ学派の基本的理論の一部を、その言語教育への適用を通じて検討することである。そのため、同学派の出発点となったプラハ言語学サークルのテーゼ——1929年10月プラハで開催された第1回スラヴ言語学者国際会議⁽¹⁾に提出——を対象とし、特に第10テーゼの翻訳を通じて問題の整理を試みる。なお、便宜上A.の解説部、B.の訳文の2部とし、注もそれぞれにわけた。

A. プラハ言語学サークルとそのテーゼについて

まず、このサークルの略史とテーゼのあらましを述べておく。

プラハ言語学サークルの活動は、1926年10月6日の第1回会合から始まった。この構想は、V. Mathesius によって長い間あたためられ、部分的に実現していたが、正式に発足したのはこの日となっている。⁽²⁾ 中心的メンバーとしては Mathesius や R. Jakobson などがおり、以後定期的に会合を開き、国際的機関誌として *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* (『プラハ言語学サークル論文集』以下 *TCLP*) を、国内誌として *Slovo a slovesnost* (『ことばと文学』以下 *Sas*) を発行し、その業績を示した。このサークルは、やがて、より包括的な“プラハ学派”という名称を与えられるようになり、内外にさかんな活動を行なった。しかし、1939年のナチスドイツの侵攻により活動は中断され、戦後しばらくして再開されたが、ある種の政治情勢のため力をそがれ、国際的な知名度は下落した。*TCLP* は廃刊されたが1966年から新たに *Travaux Linguistiques de Prague* (『プラハ言語学論文集』以下 *TLP*)⁽³⁾ を発行。ただし、4号までで以後は出ていない。*Sas* は続刊されているが、言語的な理由で、国外での普及度は非常に小さい。従って、現在では、プラハ学派とは単なる歴史的存在にすぎないという意見さえある。

しかし、この学派の古典期、つまり20年代の後半から30年代末期までの活動と業績はめざましく、その基本理念は国際的に多くの影響を与えた。特に有名な著作は *TCLP VII*、つまり N. S. Trubetzkoy (1939) であろう。この著作を中心に、プラハ学派と Saussure (1916) 的な構造主義の主張、特に音韻体系における法則性の解明が注目され、プラハ音韻学派という呼び名さえあらわれた。わが国でも、有坂 (1940) などにその反響が顕著である⁽⁴⁾。もちろん、プラハ学派とは便宜的な名称であり、この学派のすべての学者が同一意見を持っているわけではない。むしろ、このサークルのメンバーであったチェコ、ロシア、ドイツ各国の言語学者の間には各種の意見の対立があり、活発な論議を通じて、それぞれの見解を深めて行こうとする集団である。ただし、その集約的な主張が、いわゆる機能=構造主義⁽⁵⁾であった。これをさらに補足すれば、言語を単に自己完結的な全体と見なすのではなく、つねに言語外の現実と結びつけて、その反映を信号化する体系と考える立場と言える。この立場は、当然、信号化の手段を目的論的に解明する必要を生じ、どのような機能がどのような形式によって達成されるかを中心的に考察する、すなわち、機能から形式へという分析法を取るようになる。これらの詳細と実例の代表については、Vachek (1964), (1983), Mathesius (1947), (1961), 千野 (1972) などを参照されたい。

この流れについて、1960年代前半から国際的に再検討される気運が生じ、主要な論文や資料が各国にあらためて紹介されるようになった。この動きに関連して、大きな功績があったのは、戦禍を逃れてアメリカに移住し、めざましい活躍をしていた Jakobson であろう。言語学におけるこの巨人の業績は測り知れないが、その根源の多くはプラハ学派と結びついている。いずれにせよ、Vachek (1964) 以後、この学派の各種文献が重要視され、70年代から80年代にかけての言

語学の国際的動向に影響を与えている。たとえば Steiner (1982) の引用などにその雰囲気がかがわれる。⁽⁵⁾

上記の動きの具体例として、この学派のテーゼの翻訳があげられる。このテーゼは、本来、前述の第1回スラヴ言語学会議の席上、部会での討議資料として配布された。これは、プラハ言語学サークルとして、国際舞台への最初のはたらきかけである。テーゼをまとめるに当たっては、Mathesius, B. Havránek, J. Mukařovský, B. Trnka および Jakobson が中心となり、Trubetzkoy などの意見が参考にされた。

このテーゼは、会議の参加者にハンドアウトとして配布されただけだったが、*TCLP* 創刊号に L. Brun による仏訳がまず公表され、以後数十年間、これがテーゼのすべてだと思われて来た。しかし、それは正しくなく、テーゼの原文はチェコ語で、⁽⁷⁾ それを書物の形となって公刊されたのは、やっと40年ほど後の Vachek (1970) としてであった。従って、以後は直接チェコ語から訳すことが可能となり、筆者の知る限りでは、独訳と3種の英訳⁽⁸⁾ が刊行されている。わが国では、言語事情による情報の偏在のせい、Vachek (1970) の存在さえあまり知られておらず、近年テーゼの部分的日本語訳が2種出ているが、いずれも仏訳又は露訳からの重訳と思われる。⁽⁹⁾

テーゼの内容は、もちろん広範囲にわたり、スラヴ語学を中心とはしているが、より一般的な言語研究にも通用する。全体は10項から成り、各項の標題と下位見出しは次のようである。

1. 体系としての言語という概念から生ずる方法論的諸問題とスラヴ諸語にとってのこの概念の意義
(共時論的方法と通時論的方法⁽¹⁰⁾ に対するその関係、構造的比較対系統的比較、各種言語現象の発展の偶然性又は規則的一致性)
 - a. 機能的体系としての言語の概念
 - b. 共時論的方法の諸課題：通時論的方法との関係
 - c. 比較的方法を用いることの新しい可能性
 - d. 各種言語現象の発展の規則的一致性
2. 言語体系、特にスラヴ語の体系の検討課題
 - a. 言語の音声面についての研究
 - b. 単語と単語統合についての研究⁽¹¹⁾
3. 各種の機能的言語組織についての、特にスラヴ諸語における研究の諸問題
 - a. 言語の各種機能について
 - b. 標準文語について⁽¹²⁾
 - c. 詩的言語について⁽¹³⁾
4. 教会スラヴ語の現実的諸問題
5. スラヴ諸語における音声学および音韻論的転写の諸問題
6. 言語地理学の諸原理、スラヴ領域における民族地理学へのその適用と関連性
7. 全スラヴ言語地図、特に語彙地図の諸問題

8. スラヴ語の語彙研究方法の諸問題
9. スラヴ諸語の育成と批判のための機能言語学の意義
10. 言語学の新傾向の中等諸学校における利用
 - a. 母語の教授において
 - b. スラヴ諸語の教授において

以上の各項について、本質的な内容と関係する用語の問題まで含めて英訳を試みたのが Vachek (1983) である。同書にはチェコ語の原語と各種の訳語との対比がいくつか示され、批判が加えられている。たとえば、その注(同書P.120)の中では、チェコ語の原文起草者のひとりである Jakobson の用語までその対象とされている。すなわち、第3項のCの1で用いられているチェコ語 *básnická řeč* は、それぞれ *le langage poétique* (仏訳), *poetičeskaja rečevaja dejatel'nost* (露訳), *poetic language* (1978英訳) で、いずれも“詩的言語活動”の意に解されるが、これらはいずれも好ましくないとし、Vachek みずから *poetic utterance* (詩的発話) という訳語を示している。そして、このようなずれが生じたのは、原語の *básnická řeč* が、起草者の Jakobson と Trubetzkoy 両者の母語であるロシア語の影響によって誤用されたためだとする。

(筆者への Vachek 教授の私信によれば、ロシア語の *reč* には Saussure の用語 *langage* と *parole* の両方の意味が含まれるが、チェコ語の *řeč* にはそのような用法はなく、*parole* とは訳せず、*langage* の意味にしか解せないとのことである。このような事実は、この天才たちでさえ、母語の束縛から逃れられなかったという興味ある例となるであろう。) また、その数行あとの原語 *přeformování* に対して、Brun が *déformation* (歪曲化) と仏訳し、Mukařovský まだがそれを用いたのはまことに残念で、Garvin の用語 *distortion* にもそれが影響していることが指摘され、*reshapement* (新形態化) が最もよいだろうと述べられている。ただし、同じくCの2の原語 *aktualizace* については、Garvin の用語 *foregrounding* (前景化) が英語としては一番適切であろうとし、これを採用している。

Vachek (1983) は、さらに「あとがき」の注の中でもテーゼの各種の翻訳について要点的に紹介している。⁴⁴⁾ その中で用語と内容理解の問題について最もきびしく批判されているのは、Johnson (1978英訳) である。これは、Vachek (1970) によるものではあるが“海賊翻訳”(a pirated English translation) であるとされ、信頼がおけないものだと言われている。(同書p. 229) たしかに、この翻訳には難点が多いようで、たとえば、その内容をも示すべき標題の中に、*manifesto* という語が使われていることがすでに問題かも知れない。前述のように、テーゼ(原語 *teze*) はその意味通り討議の資料とすることを目的としたので、“一方的宣言”の感のある *manifesto* という語の選択は不適切であろう。(実際に、Jakobson (1971) などには、このテーゼに対する参加者の反応をうかがわせる記述がある。) これに反し、Steiner (1982) 中の J. Burbank (1982英訳) は、2, 3の点を除けば非常に正確だと評価され、また J. Scharnhorst (1976独訳) も賞讃されている。

上述の問題点の他に、Vachek (1970) より以前の翻訳と以後のものを決定的に区別するのは、その内容であろう。すなわち、Vachek (1970) 以前のものは、第9テーゼまでであるが、以後のチェコ語の原文によるものには第10テーゼが含まれている。最初の訳者 Brun が第10テーゼを省略した理由はさだかではないが、Vachek 教授からの私信を参考にすれば、⁴⁵⁾ おそらく理論性と

いう点で第1項から第9項までと異なり、第10項はあまりにも实际的だったからであろう。しかし、言語理論の実際問題への適用も、この学派の大きな特長であり、この点を無視してはならないと思われるので、以下第10テーゼの要点の一部を考察する。

第10テーゼは、標題からある程度推察できるように、言語教育に関するもので、会議の第3部会の討議用資料として配布された。(第1テーゼから第9テーゼまでは第2部会の討議資料である。)。内容的には、中等学校における母語の教育と母語以外のスラヴ語の教育についての基本的な考え方を述べている。具体的な教授法と言うよりは、むしろ教育の指針とでもすべきものであるが、ここで強調されているのは、技術そのものではなく、その背後におかれるべき言語理論である。特に、当時全盛であったかと思われ、何よりも言語学の中心とされた歴史的比較言語学について、中等学校の言語教育における役割を正當に位置づけ、当時としては新しい流れであった共時的機能言語学の考え方を広く用いるべきだとした点、大きな改革の主張と評価できる。また、言語をひとつの機能的体系と見るのと同時に、その体系内のゆれ、または場合に応じた文体的差異の強調が目立つ。そして、標準文語を教授の主目標とするにしても、学習者の常用語または民間語の価値を否定せぬようにとの意見は、近年全世界的に重視されている。これらの問題は、この派の学者の多くが考察していることで、プラハ学派の中心的主張と考えられる。とりわけ、母語の教育においては能力の開発に主眼をおき、知識そのものの詰め込みを問題にせぬようにとの意見には注目すべきであろう。その他、さまざまな言語機能を、すべて同程度に修得することが困難であるとの指摘も、実地の言語教育において重要な点である。母語以外の言語教育についても、留意すべき点が要領よくあげられている。たとえばチェコ語とロシア語に関連しての学習事項の整理の仕方は、いわゆる対照言語学、または言語性格学²⁰の一端を示すものである。これらの具体例は Fried(1972) の諸論文などにも示されており、わが国における外国語学習にも十分参考となる。²¹

ともかく、このテーゼに盛られた内容は、半世紀以上経た今日でも、まだ新鮮味を失なっておらず、今後もその価値を発揮できると思われる。特に、わが国における言語教育は、国語・外国語の両面にわたって、理論的立場よりも技術性に重点がおかれすぎる感があり、このテーゼ、特に第10項は、理論的基礎またはその補強として利用し得るであろう。もちろん、テーゼは第1項から第10項まで有機的に関連しているので、本来は、テーゼ全体を通じて検討すべきものであるが、さしあたり、第10テーゼの日本語訳を試みて、今後の探究の布石としたい。

A. の注

- (1) *TCLPI* はこの会議に献じられているが、会議の全体的記録は発行されておらず、各所に断片的な記述しかない。
- (2) Vachek (1966) p.4 その他参照。
- (3) *TLP I* は、戦前の *TCLP* 以後の継続的發展を十分に示すものである。
- (4) Trubetzkoy に対する強い批判が有坂(1940)p.10で次のように述べられている。「……私は、Trubetzkoy 一派の誤れる「普遍主義」「構造主義」を排撃し、理想から現実を演繹するやうな理論的誤謬を斥け、あくまで音韻を「與へられたる既存の対象」として観察しようとする。……」ただし、*TCLP VII* は同書に参照されていないようである。
- (5) 一般に、Mathesius を中心とするチェコの学者たちは機能主義に重点をおき、Trubetzkoy や Jakobson などロシアの学者たちは構造主義的傾向が強いと見られる。もちろん、機械的な区分はできない。
- (6) Steiner (1982) ix.の序文。As the Swiss phenomenologist Elmar Hostenstein has stated, “without any doubt, the wind is now blowing in the direction of Prague.” これには “50 Jahre Cercle linguistique de Prague : Stichworte zu einem Vergleich von Prager und Wiener Kreis” *Neue Zürcher*

Zeitung, Dec. 23, 1976 よりの引用という注がついている。

- (7) Pražský lingvistický kroužek (1929)
- (8) Scharnhorst & Ising (1976独訳) および Johnson (1978英訳), Burbank (1982英訳), Vachek (1983英訳)
- (9) 轡田・小瀧 (1975邦訳) ただし〈第三テーゼ〉のみ。
北岡・大内 (1982邦訳) ただし, 第3項まで以下は略されている。なお, 訳者付記 (p.378) には, 第9項の標題までしか記されていないので, Vachek (1970) は参照されていないと思われる。
- (10) Vachek(1983英訳) はこれについて説明し, 原語の *synchronická (metoda)* と *diachronická (metoda)* に対し, *synchronistic* と *diachronistic* という訳語を示している。
- (11) この問題の中心は, “言語的命名単位 (単語) についての科学” と “統一単語結合 (統語) についての科学” および “形態 (単語および単語群の形態組織) についての科学” である。Vachek (1983英訳) は, それぞれについて *linguistic onomatology* (原語 *pojmenování*), *functional syntax* (原語 *usouvztahování*), *systems of word-forms and word groups* (原語 *systemy forem slovních i skupinových*) の訳語を示している。なお, Mathesius (1947), および (1961) 参照。
- (12) “標準文語” の原語は *spisovný jazyk* で, Vachek の英訳形は *the standard literary language* である。この概念については, テーゼの本文中にある程度規定されているが, 原文起草者のひとり共著者とする Havránek & Jedlička(1960) のチェコ語文法書 p.4 には, 次のような趣旨の説明がある。
「……書いたり印刷したりするのに用いられ, 公共生活, すなわち学校, 行政, 講演, 会議, 放送, 劇場, 映画などで文字として, 又多く口頭でも用いられるチェコ語の形式は全国的にみて統一的である; これを標準文語, 標準チェコ文語と呼ぶ。標準チェコ文語はチェコの国語の最も重要で最も完全な形式である……」これと対比されるものは, *lidový jazyk* (民間語) 又は *obecný jazyk* (常用語) である。B. の注⑤参照。
- (13) この部分についての関心はわが国でも高く, Jakobson などを通じてのロシア・フォルマリズムとの関連が指摘されている。たとえば, 水野 (1982) 参照。
- (14) Vachek(1983) があげている翻訳は, 注⑧のそれぞれの他, 次の通りである:
V.A.Zvegincev(1965) : *Istorija jazykoznanija XIX i XX vekov v očerkax i izvlečeniach*. Moscow. pp.123-140(抄訳)
N.A. Kondrašov(ed.) (1967) : *Pražskij lingvističeskij kružok*. Moscow. pp.17-41 (前記の抄訳と V.A. Matvejenko の補訳)
S. Pautasso(1966) : *Il Circolo Linguistico di Praga*. Milano. pp.39-113.
- (15) 私信 (1986年8月4日付) の要旨によれば, 「TCLP I に第10項が含まれていないのは, おもに理論的な方向をねらい, 応用的なものは目指さなかったから」であろう。「ただし, ある部会では言語教育が実際に論じられ, 第10項もチェコ語版のテーゼに加えられ配布されたので, Vachek(1970) にこれを補い, 自身の英訳—Vachek(1983英訳)—にも加えた」わけである。
- (16) Mathesius の用語では, *obecná lingvistika*(一般言語学) および *lingvistická charakteristika* (言語性格学) である。
- (17) Mathesius(1936), (1961) それぞれの日本語訳を参照されたい。

B. 第1回スラヴ言語学会議 (1929年 プラハ) に提出されたテーゼ 第10項 (プラハ言語学サークル)

言語学の新傾向の中等諸学校^①における利用

a, 母語の教授において

1. 中等諸学校において母語はどのように教えられるべきか, という実際的な問題の解決に, 歴史的比較言語学は非常にわずかしか貢献しなかった: 歴史的比較言語学の研究対象は, ある言

語の発展であって、その際、何よりもまず、その言語のより古い時期に注意を集中し、さらに、現代語については、標準文語よりはむしろ諸方言に注目したのである。

言語学の新傾向は、この実際的な問題に関しても、より信頼できる基盤を与えることができる：新しい言語学と、中等諸学校における母語の教授という仕事の間の接点とは、特に次の諸項目である：

共時論的言語学にとっての研究対象は、共時的言語現象、つまりある一定時期、とりわけ現代の言語である：それ自身のこの研究対象によって、共時論的言語学は中等学校での仕事に近づき、さらに現代の標準文語もあらためて言語学的研究の対象とすることにより、さらに関係が深まる：

機能言語学は、言語の中に、さまざまな言語機能によって決定される、目的を持つ諸手段の複合体を認める。中等学校における母語能力の育成の目標は、目的に従い状況に応じて、言語手段を経済的合理的に使用し得る能力、すなわち特定の場合（たとえば会話、各種の書記表現、論述など）に、与えられた言語機能を、できるだけよく使いこなせる能力を養成することである。

機能的体系としての言語という概念と、個々の現代語についての正確な**性格学**^②の確立への努力は、学校における言語現象の分類とその説明のためにも、より安全な基盤を提供できる。

2. 科学的言語研究と中等学校での母語教育の仕事との基本的な相違は、もちろん次の点にある。すなわち、学校では、文化生活と関係するさまざまな機能の点で、その言語、特にその標準文語の最善の**実際の活用能力**の修得を目的とする。また、中等学校における他の諸教科と母語の教授との間に、まさに重要な相違がある：すなわち、母語の教授に際して、どれだけ言語学的知識を獲得したかは問題ではない。^③

同様に、諸学校での非母語^④教授と母語の教授、より適切に言えば母語能力の育成との間にも重要な相違がある：母語においては、言語的対応の段階的な発展が関心事になるが、これは、生徒たち自身が実生活から持ち込むものであり、そして言語の一部の機能にとってはまったく正確で精密なものである。

3. 母語教授の（理論的）**学問的目標**は、この（技術的）**実際的目標**の前では背後にしりぞく。理論的教授の範囲は次の点に従って決定され得る。すなわち、一般教育的、文化的立場から、該当する段階や学校の種類にとって、どれだけの理論的知識が必要と考えられるか、および、標準文語の特定の諸機能について、どれだけの言語実習が必要か、ということである。（以下の8参照）

4. 上述の**言語的対応の段階的発展**にとって、歴史的音韻論や形態論に関する諸事実の知識、又は方言がどのように分類されるか、などについての知識は、ほんのわずかしは役立たない。しかし、その発展にとって、非常に効果的に役立つのは、**なまの言語についての考察**であり、その場合、生徒は、自分の知っている言語手段とそれまで知らなかったものとを区別し、その使用法を認識し、さらに、それらによって意図された目標にどうやって到達したかを考慮する。同様に効果的なのは**生徒自身の試み**であり、生徒は自分の知っている言語手段を用いて、与えられた機能的仕事を達成しようと努力する；その仕事は、もちろん最も簡単な伝達の機能から出発し、次第により複雑なものになって行く。このような方法で、用語、命名および統語の手段が拡大され洗練されて行き、さらにそれらの使用法（又は伝統的な呼び方に従えば：語彙、語形成およびそれらの意味についての科学—形態論と意味論—、さらに、狭義広義の統語論）が認識されて行く。このような接近法は、書かれた文だけに限らず、口頭による発話に対しても考慮されるべきで、その音声面にも注意し、それらを洗練して行くべきである。

5. 標準文語の機能の点から、次の問題が生ずる。すなわち、このような母語の開発育成は、

生徒が自身の標準文語の内容的面を十分に把握できるよう成熟するまでは終らせることができない；それどころか、民間語^⑤と異なる領域での標準文語の洗練は、まさに中等学校の上級学年においてなされるべきである。

6. 生徒たちに次のことを認識させる必要がある。すなわち、標準文語においてさえ、その目的に従ってさまざまな変異体があること、および、正しい効果的な文体^⑥の本質は、言語的表現がその表現の目的にとって適切かどうかにあること。つまり、単純な文体から“装飾的”文体に至るまでの、文体による評価の階級づけを、学校から完全に追放することが必要である。

7. 実際的な理由により、最初から——ただし段階的に——次の点を強調する必要がある。すなわち、標準文語の音声および文法体系は、生徒が家族や日常生活から学んで知っている、民間（常用）語とは異なっている。ただし、だからと言って、民間語と標準文語がどのように対照され得るかを教える必要はまったくない。それどころか、生徒たちが、母語について自分自身の持つ知識に対する不信を起さぬようにすることに、非常に注意深く努力しなければならない；学校は、その知識を否定するのではなく、それが支柱となるようにすべきである。

8. 獲得された言語知識の各項は、まとまった言語体系を認識するよう総合することが必要である：言語体系の発見とそれについての勉強は、生徒にとって言語教育以外の意味をも持つ。しかし体系を意識することは言語の実地使用にとっても重要である。実地使用において問題となるのは、意識的、意図的な表現と創造であり、これらは、まさに標準文語の諸機能において必要なのである。

b, スラヴ諸語の教授において^⑦

1. 一般に広く認められているように、学校での非母語のスラヴ語の知識は**実用的性格**を持たねばならない。このような知識は、一般に学問的知識と完全に区別され、学問的知識は、ただ歴史的比較的方法によるものと認められて来た：しかし、学問的研究としての歴史的比較的语言研究を、学問的でないとされる実用的知識と完全に区別するこのようなやり方は、現代言語学の立場から言えばただの偏見にすぎない。言語の実用的学習指導も、学問的に理由づけられ支持されることが可能であり、又そうすべきである。

歴史的比較言語学は、言語の実用的学習指導にこの学問的基礎を与えることができない。言語の実用的学習指導は、何よりもまず一定の機能、一定の社会的環境、そして一定の状況における言語の知識を要求する。なぜなら、具体的な機能と関係のない言語の研究は、単なる抽象にすぎないからである。そのため、この問題を学問的に解決する可能性を提供するのは**機能言語学**である。機能言語学は、言語を、言語活動の目的に従って、話者個人又はある集団が用いる諸手段の体系であると認識している。

2. 一般に知られているように、母語においてすら、さまざまなその機能を、すべて同じ程度に修得するであろう人の数は、かなり少ない；しばしば出会うことだが、たとえ言語学的訓練を受けている個人でも、自分の専門のことでないかぎり、要請、告知・新聞情報などを書くのに苦労するか、又はまったくそれができない。この事実は、言語の実用的学習の方向を規定する：たとえば、商業関係の学校では、生徒が商業上の目的に用いられるその言語（商業会話・商業通信・商業新聞・商業関係の諸論文の言語形式）を修得することが問題である：より狭い意味での中等学校では、専門的な学校と異なって、生徒が一般教養的な言語（すなわち、特に専門的色彩のない教育を受けた層の人たちの言語で、話し言葉および書き言葉両方の形式）を修得することが大切である。特別な機能は別として、常に必要なのは、基本的な社会的機能を持つ言語事実、たとえば挨拶・紹介の言葉・天候や時間についての質問の仕方などを知り、それを修得することであ

る；しかし、このような要素は比較的少ない；どの言語学習でも、これらは出発点として用いられ得るものである。

3 スラヴ諸国の学校でスラヴ諸語を教授する際には、それらの言語の親近関係を利用することが必要である。そのやり方として、授業（又は講義）の際にも、教科書の中でも、最初から、それぞれのスラヴ諸語の言語体系がどのような点で似ているかばかりでなく、とりわけどのような点で異なっているかをも説明し練習させる必要がある。教授法自体と同じく、教科書も、生徒たちの母語と学習されるスラヴ語との間の差異に基づいて、それぞれ異なるものでなければならない。

4 教授に際しては、音韻体系の個別的特徴（発音による実現と正書法による表現^⑨の両者を含めて）について、又特定のスラヴ語の文法体系およびその語彙構造の主な特徴について注意することが必要である。それらの知識を得るのは、ふつうの伝達と文脈において段階的になされるべきで、個別的な単語についてなされてはならない。段階の詳細を決定するのは、どのようなスラヴ語の環境でどのようなスラヴ語が学ばれるか、およびその学校の種類と程度、さらに生徒たちの全体的な教育水準である。たとえば、チェコの生徒たちにロシア語の音韻体系を記述する場合には、硬子音と軟子音の交替、ストレスのない母音の弱化、ストレスの主要な機能が強調される：ロシアの生徒たちにチェコ語の音韻体系を記述する場合には、母音の長短の機能、母音の音価がストレスに影響されないこと、一定の条件下で前口蓋母音と後口蓋母音が文法的に交替すること（いわゆるウムラウトの結果）などが強調される。語形態組織の記述の場合には、生産的な屈折形式の強調が必要であり、又語集団の形態（いわゆる統語）の記述の場合には言語間の主要な相違に注意することが必要である。（ロシア語にとっては、助動詞の役割、必要性と可能性の表現、複合的な動詞表現、前置詞、接続詞およびそれらの機能など）^⑩

語彙に関しては、次の配慮が正当と考えられる。すなわち、その知識を拡大するには、具体的な文脈および個別的な言語伝達により、その全段階において、その言語的親近性のために、学ばれている言語についての生徒の側からの解明という性格を持つようにすべきであり、まったく異種の死語（ラテン語、ギリシア語など）の学習の場合にしばしば見られるように、教師による解明を単に教える、という性格のものであってはならない。つまり、単に知識を得ることよりも、理解することが優先するようにすべきである。もちろん、個個のスラヴ語の語彙には重要な特殊性がある。たとえば、ロシア語にとって非常に重要なのは、その中の古代教会スラヴ語の層とその文体論的意味を示すことである。（glava-golova, otvratit-otvorotit, isčerpat-vyčerpat など）^⑪

5 ただし、学んでいる言語と自分自身の言語との間に、実際にあるよりも大きな一致があるという考えが、学習の初期に固まらないようにしないと危険である；他のスラヴ語の諸カテゴリーの機能が、あやまって母語の体系内に移るということになるから；これにより、独特の“汎スラヴ語、”又はチェコ・ロシア語、セルビア・ポーランド語、ロシア・ブルガリア語などが生ずる。諸カテゴリーの機能は、何よりも、それ自身の言語体系の中で処理される必要がある。^⑫

6 上述のことに従い、教授方法論的に最も主要な問題は、上述の方向に添って深く工夫された教科書・アンソロジーおよびその他の補助教材^⑬を練り上げることである。それらは、目標言語の一定の機能を段階的に修得可能にしてくれるであろう。そのような補助手段の集合は、言語知識の修得に安全な基礎を与える。生徒たちはそのような基礎を持って実生活に入り、具体的状況が与える諸問題に従い、自身が入った社会的環境に応じて、それを拡大できるようになるであろう。

B. の注

- (1) 1976独訳 (p.68) にある Havránek の脚注によれば、1929年のチェコスロヴァキアにおける中等学校は、8年制(ギムナジウム、実科ギムナジウム)と7年制(実科学校)で、入学年齢は10才から11才であった。
- (2) Aの注16参照。
- (3) この指摘は、知識の量ではなく質が問題だとするのであろう。特に、活用能力を主眼とするにしても、一定量の言語的知識は当然必要である。原語の *vědomost* は“専門的知識”の含みを持つ。
- (4) 原語は *cizí jazyk*. 英訳形は *foreign language* で、わが国では一般に“外国語”と訳されるが、これは不正確であろう。言語と国語とは同一の分布をなさない。単一言語、単一民族という意識の強いわが国では、国語対外国語という図式が支配的でありすぎるような気がする。
- (5) Aの注12参照。Vachek(1983英訳)では *popular language* と訳されている。これは、標準文語にくらべると、規範性がより低く、地域性がより高いもので、一般の日常生活で、親族や友人などとのくだけた場面に用いられる形式を指す。
- (6) 原語は *styl*. 英訳は *style*. ただし、“文体”という用語は、日本では個人的なものを指す傾向が強いようである。
- (7) これは、スラヴ諸国における母語以外のスラヴ諸語の教授についてのテーゼであるが、1976独訳(pp.70-71)の欄外には Havránek の注があり「スラヴ語だけでなく他の諸言語の教授にも有用である」という趣旨が述べられている。
- (8) 実際の発音と正書法とは、必ずしも一致しない。もちろん、正書法にはそれなりの重要な機能がある。たとえば日本語の助詞を示す、は、へ、をなどの表記を参照。
- (9) チェコ語とロシア語、その他のスラヴ語間にはそれぞれ微妙な差異があり、十分な注意が必要である。スラヴ諸語は系統的に同じとされるが、この比較は系統論的な立場とは別で、対照言語学的方法である。従って、同様な原理が、系統的に異なる言語間、たとえば日本語と英語の間などにも適用され得る。
- (10) この例にあるそれぞれの組は、音的に異なるばかりか、意味的にも微妙な差がある。教会スラヴ語系の各語には、廃義もあり、抽象性または比喩性がより高く、具体性や日常性はより低いようである。たとえば、*glava* (かしら) 対 *golova* (あたま)、*otvratit'* (防止する) 対 *otvorotit'* (俗。いやにならせる)、*isčerpat'* (究めつくす) 対 *vyčerpat'* (くみほす) など。これと似たような問題が、日本語の内部にもあると思われる。たとえば、いわゆる“やまとことば”系の表現と漢語系の表現、古語と近代語などの文体論的差異が認められる。これは、共時的構造に通時的発展が反映されている実例となる。
- (11) これはいわゆる言語干渉の問題で、多かれ少なかれ、ほとんどの学習者にみられる傾向である。
- (12) 教材は、母語に関しても、「何を教えるか」ということと関連して、根本的に重要であろう。参考のために、昭和53年(1978)改訂の中学校・高等学校用『学習指導要領』の国語科の分を見ると、国語・現代文・古文・漢文などの区分指定はあるが、内容について明確な規定がないように思われる。すべてを画一的にする必要はないが、内容についての統一的理解があった方がよいのではないだろうか。

参考文献

- 有坂秀世(1940)『音韻論』東京 三省堂。
- Brun, L.(1929 仏訳)“Thèses présentées au Premier Congrès des philologues slaves” *TCLP I*. pp.33-58.
- Burbank, J.(1982 英訳)“Theses Presented to the First Congress of Slavic Philologists in Prague, 1929” Steiner (1982) pp.3-31.
- 千野栄一(1972)「プラーク学派の言語観」『言語研究』第61号 pp.1-16.
- Fried, V.(ed.) (1972) *The Prague School of Linguistics and Language Teaching*. London.
- Garvin, P. L. (ed.) (1964) *A Prague School Reader on Esthetics, Literary Structure, and Style*. Washington D. C.
- Havránek, B. & Jedlička, A.(1960) *Česká mluvnice*. Praha.
- Jakobson, R.(1971) “Retrospect” *Selected Writings II*. The Hague & Paris pp.711-22.

- Johnson, M.K.(1978 英訳) “Manifesto Presented to the First Congress of Slavic Philologists in Prague”
Johnson(1978) pp.1-31.
- Johnson, M.K.(1978) *Recycling The Prague Linguistic Circle*. Ann Arbor.
- 樽田収・小瀧照夫 (1975 邦訳)「プラーク言語学サークル<第三テーゼ> 言語の多様な機能に関する研究の諸問題」『月刊 言語』 1975年 4月号 pp.52-58.
- 北岡誠司・大内和子 (1982 邦訳)「プラーク言語学サークル 第一回スラヴィスト会議提出のテーゼ」 水野 (1982) pp.351-78.
- Mathesius, V.(1936) *Nebojte se angličtiny! Průvodce jazykovým systémem*. Praha.
(邦訳) 千野栄一・山本富啓 (1986)『マテジウスの英語入門 対照言語学の方法』東京 三省堂。
- Mathesius, V.(1947) *Čeština a obecný jazykozpyt*. Praha.
- Mathesius, V.(1961) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém*. Praha.
(邦訳) 飯島周 (1981)『機能言語学』東京 桐原書店。
- 水野忠夫(編) (1982)『ロシア・フォルマリズム文学論集 2』東京 せりか書房。
- Pražský lingvistický kroužek (1929) “Teze předložené prvému sjezdu slovanských filologů v Praze 1929”
Vachek (1970) pp.35-65.
- Saussure, F.d. (1916) *Cours de linguistique générale*. Paris.
(邦訳) 小林英夫 (1972)『ソシュール 一般言語学講義』東京 岩波書店。
- Scharnhorst, J. (1976 独訳) “Thesen des Prager Linguistenkreises zum I. Internationalen Slawistenkongreß” Scharnhorst & Ising (1976) pp.43-73.
- Scharnhorst, J. & Ising, E.(1976) *Grundlagen der Sprachkultur Beiträge der Prager Linguistik zur Sprachtheorie und Sprachpflege Teil I*. Berlin.
- Steiner, P.(ed.) (1982) *The Prague School Selected Writings, 1929-1946*. Austin.
- Travaux du Cercle Linguistique de Prague (TCLP)*. Praha,
I. (1929), II. (1929), III. (1930), IV. (1931), V. (1934), VI. (1936), VII. (1939), VIII. (1939).
- Travaux Linguistiques de Prague (TLP)*. Praha,
1. (1966), 2. (1966), 3. (1968), 4. (1971).
- Trubetzkoy, N.S (1939) *Grundzüge der Phonologie*. TCLP VII.
(邦訳) 長嶋善郎 (1980)『音韻論の原理』東京 岩波書店。
- Vachek, J.(ed.) (1964) *A Prague School Reader in Linguistics*. Bloomington & London.
- Vachek, J.(1966) *The Linguistic School of Prague An Introduction to Its Theory and Practice*.
Bloomington & London.
- Vachek, J.(ed.) (1970) *U základů pražské jazykovědné školy*. Praha.
- Vachek, J.(1983 英訳) “Theses presented to the First Congress of Slavists held in Prague in 1929”
Vachek (1983) pp.77-120.
- Vachek, J.(ed.) (1983) *Praguiana Some Basic and Less Known Aspects of the Prague Linguistic School*.
Amsterdam & Philadelphia. [1986年11月7日受理]